



博士のたった一つの望み

博士のたった一つの望み

私は天才だ。天才というのは孤独なものだ。

博士は、スーパーのビニール袋を両手に引っさげて、照り返しの厳しい真夏の道を歩いていた。歩道と車道間の街路樹が僅かに影を作っているが、路上駐車の自転車が影を選挙し、人々は皆、太陽に照らされて歩いていた。

私は優秀な人間だ。優秀な人間は一人で何でもこなすものだ。

博士は、目の前の男女のカップルを見て、顔をしかめた。彼らを見て不快になったのではない。まっすぐ前を見ると、眩しくて目を開けられないのだ。

私は、孤高の天才なのだ。

恋愛など一切せずにここまで来た。五十歳を過ぎた辺りから、歳を数えるのをやめてしまった。周りには誰もいない。友人など、初めから持っていない。

それで構わないのだ。私を理解してくれる者などいない。私が理解できる人間もいなかった。世の中は、なんと無秩序で傲慢で、それでいて無知を自覚できない愚かな人間ばかりなのか。

6歳の頃だ。国語辞書を読んでいる私を、父が指を指してゲラゲラ笑った。彼が何故面白がっているのか瞬時に理解できた。6歳という何も分かっていない幼児が、知識の塊である国語辞書を読む様が滑稽に見えたのだろう。何と愚かな。何も知らない者こそ、辞書を引き、知識を蓄えるべきだろうに。私が初めて愚か者認定したのは、父だ。

世の中が肯定するものを、私は否定する。反対に、世の中が否定するものを、私は肯定する。わざとじゃない。誰かを困らせるつもりもない。自然に、そうなっていったのだ。

別に構わない。おかげで私は、己の研究に没頭することができた。

博士は、もうこれ以上出ないというほど汗を流して、ようやく研究所に着いた。誰もいない、誰も寄り付かない場所に建てた故に、買い物に行くのも一苦労だ。

郵便受けを開けると滅多にこない郵便物が一枚入っていた。郵便物が入っていることを全く期待せず開けたので、その白い四角い紙を視認した時、博士は思わず動揺した。

誰だ？ 恐る恐る手紙を取り出し、差出人を見た。一瞬誰か分からなかったが、博士と同じ名字を見ると、記憶が少しずつ、紙にインクが染みこんでいくように、いつ忘れたのかも分からない遠い記憶を蘇らせた。

それは博士の弟だ。弟と呼ぶのも躊躇う。もう何十年も会っていない。最後に会った日すら忘れた。何のようだが知らないが、ろくな事じゃないのは確かだ。博士は手紙をゴミ箱に捨てた。

博士の一連の動きを、部屋の片隅でじっと見つめている生き物がいた。博士がそれに気づくと

、険しい顔をほころばせ、ゆっくりと近づいた。

「シンディ、ただいま」

誰も寄せ付けない博士だが、唯一にして無二の友人がいる。

いや、友猫がいる。

シンディは、雨の日、研究所の外で鳴いて震えていた。まだ子猫だった。雨音に混じって、僅かに聞こえる子猫の鳴き声が煩わしく、博士は泥だらけになりながら、手入れのされていない草だらけの庭を探して歩いた。険しい顔で庭を練り歩く博士を見て、子猫は一層震えてしまったが、博士が取って食うつもりじゃないことが分かったと、少しずつ心を開き始めた。

今ではお腹を出して寝ている始末だ。

シンディは、正直だ。嘘をつかない。動物全般そうだろう。寝たい時に寝て、食べたい時に食べ、甘えたい時に甘えて、一人でいたい時は姿を隠す。自己に忠実に生きるその姿勢を、博士は尊敬すらしていた。欲望に忠実な愚かな人間と違い、シンディの欲望は、あくまで動物的で、生物として正直だ。非常に美しい。もし、シンディが小判をよこせと言い出したら、博士はたちまちシンディを外に放り投げるだろう。

シンディをひとしきり眺めると、博士はゆっくりと立ち上がり、先程買ってきたスーパーの買い物袋を持って、研究室に入り、扉をゆっくりと閉めた。

いよいよだ。博士は買い物袋からレモンを取り出した。研究自体は完成している。よもやレモンが必要になるとは思わなかったが、これで研究を実証することができる。

博士は机の上に並んでいる細い筒を眺めた。一本製作するのに実に三年はかかっている。黒い筒は中が空洞になっており、十本ほどが器用に立っていた。筒はそれぞれ黒い箱にケーブルで繋がれ、さらに箱は研究室のアンテナに繋がっている。

レモン絞りを使って、レモンの果汁を取り出すと、ビーカーに移して、メモリに合わせて量を計り、筒の中に少しずつ流し込んだ。

これで完成だ。たったこれだけのために私は汗を大量に流したのだ。まあ、汗などどうでもいい、今日までの長い歳月に比べれば、どうってことない。

これでいよいよ、いよいよ全てが変わる。

世の中から嘘が消えるのだ。私がボタンを押せば、この機械からアンテナを通して世界中に電波が流れる。電波は人の脳に作用し、嘘がつけなくなるのだ。社会から嘘は根絶され、人は心を強制的に開示される。これにより、人は腹を割って話すしかなくなるのだ。しばらくは社会は混乱するだろう。犯罪や事件も増えるだろう。しかし、その先には必ず人として美しい社会が生まれるはずだ。

ああ、いよいよだ。いよいよ全てが変わる。いよいよ……。

博士が目を閉じて感動に浸っていたのは、わずか数秒だった。その数秒の間に、研究室の扉が

開き、シンディが入ってきて、博士を目視すると、しっぽをまっすぐに立てながら、甘えた目で机に飛び乗った。

機械の壊れた音か博士の悲鳴か判別つかない音が研究所を響かせた。机の上の筒は無残に砕け、中からレモンの汁が溢れていた。机から滴るレモンの汁が、博士の嗅覚を刺激すると、ようやく博士は我を取り戻し、事態を把握した。

机の上から、シンディがこちらを眺めている。その無邪気な眼差しは、はやく撫でてくれと言っているのが分かるほど輝いていた。

博士はシンディを撫でた。怒るつもりは毛頭ない。シンディに悪気が無いのは、人目で分かる。扉をしっかりと閉めなかった自分が悪いのだ。

「そうかそうか、寂しかったんだな。しばらく留守にしていたもんな」

博士はシンディを抱くと、シンディの肉球がレモン汁まみれなことに気づき、シンディを浴室に連れて行った。

その夜、博士は机の上を片付け、お酒を飲むだけ飲むと、静かに眠った。

シンディは博士が眠ったことを確認すると、器用に前足でベランダのサッシを開け、室外機から屋根の上に登った。シンディは夜空に浮かぶ月を見上げた。

「こちらBES。文明発展容疑物を破壊した。詳細を送る」

シンディは喋っていない。一種のテレパシーを月に向けて発信していた。間もなく月からの交信が届いた。

「ご苦労だった。なるほど、人が嘘をつけなくなる装置か。あと三十年は不要だな。引き続き、地球文明の発展を調整してくれ」

「了解。寂しがり屋の爺さんの相手に戻る」

「健闘を祈る」

シンディは交信を終えると、ゆっくりあくびをして、足音を立てずに室内に戻り、博士のベッドに潜った。